

時の動き

私たちは、被爆者から何を継承するのか？

—日本被団協ノーベル平和賞受賞を祝して—

核兵器をなくす日本キャンペーン 事務局スタッフ

浅野 英男



2024年10月11日、日本被団協へのノーベル平和賞受賞が発表されました。「自らを救うとともに、私たちの体験をおして人類の危機を救おう」と立ち上がり、証言活動と核兵器廃絶の運動を続けてきた被爆者の皆様に感謝と敬意を表します。

なぜ、日本被団協がノーベル平和賞に選ばれたのか？ ノーベル委員会は、次のように述べています。「今こそ核兵器とは何かに思いをいたすことに価値がある（強調筆者）。」

近年、核の脅威は急速に高まっています。ウクライナ侵攻を続けるロシアのプーチン大統領は核の威嚇といえる

言動を繰り返しており、核保有国イスラエルも中東での武力攻撃を継続し、元閣僚はガザ地区に対する核使用を「選択肢の一つだ」と述べました。米中対立や朝鮮半島の情勢が先鋭化し、日本でも「核共有」論や「非核三原則の見直し」が語られています。世界の現役（「実際に使える」核弾頭数は現在9583発で、2018年から332発増加しています。グテーレス国連事務総長は、核戦争のリスクが「この数十年間で最高レベル」にあるとしています。核の脅威は、いまや現在進行形の問題です。私たちは、核の時代を生きる当事者なのです。

核戦争の危険性がかつてなく高まる

今だからこそ、ノーベル委員会は、核兵器が人間にもたらすものを見つめ直す必要性を訴えたのだと思います。被爆者は、核戦争の悲惨さを次のように語っています。

赤く焼けただれてふくれあがつた死体の山。眼球や内臓のとび出した死体。黒焦げの満員電車。倒れた家の下敷きになり、生きながら焼かれた人々。髪を逆立て、ずるむけの皮膚をぶら下げた幽霊のような行列。人の世の出来事とは到底いえない無惨な光景でした。

たとえ生き残ったとしても、被爆者

◆時の動き



上 国連で証言する被爆者（通訳：浅野）

下 外務省前にて、2024年7月



本は同条約に参

あります。

残念ながら、日

は、放射線障害や社会的差別などに苦しみました。核兵器は、「人間として死ぬことも、人間らしく生きることも許さなかった」のです。この核戦争のリアルを知るからこそ、被爆者は、核兵器の使用は何があっても許してはならないと訴え続けてきました。この「核のタブー」を私たちは守り続ける必要があるのです。

核戦争を二度と繰り返さないための道は、核兵器の廃絶である……これこ

そ被爆者が求めてきたものです。これは、非現実的な理想論ではありません。ノーベル委員会フリードネス委員長は、「核兵器に安全保障を依存する世界でも文明が生き残ることができると考える方が、よほど非現実的です」と語っています。核廃絶は、私たちの平和と未来を守るための現実的な選択肢です。

しかし、被爆者の志はまだ道半ばです。2021年、ヒバクシャと世界の市民の努力によって、「核兵器禁止条約」が発効しま

した。25年3月

には、第3回締

約国会議が開催

されます。核兵

器の禁止から廃

絶へと歩みを進

めていく必要が

あります。

加しておらず、過去の会議にオブザー

バーとしてすら参加していません。そ

れらを実現しようと24年4月に発足し

たのが「核兵器をなくす日本キャン

ペーン」です。国内35団体・25個人を

母体とし、被爆者から20代までが世

代を超えて取り組む新たなキャンペ

ーンです。25年2月8日・9日には、東

京の聖心女子大学にて「被爆80年核

兵器をなくす国際市民フォーラム」を

開催します。被爆者の訴えを全世代の

市民が継承し、被爆者と一緒に「核兵

器のない世界」を目指しています。

日本被団協のノーベル平和賞受賞が

被爆者への祝意だけに終わってはなり

ません。核廃絶は、被爆者だけに任せ

ていれば成し遂げられるものではありません。

私たちが受け継ぐべきは、一人の市民として立ち上がる「勇氣」と

「行動」であると確信します。

（あさの ひでお）